

インド留学記

プーラに学ぶ

はじめに

インド留学のために、日本を出発したのは昭和四九年十一月一日でした。それから、実に十二年の星霜が流れました。インドには、途中二、三回一時帰国しましたが、四年半滞在しました。インド留学生活は、わたしの青春時代を色濃くそして強烈に彩つてくれました。インドは、わたしの学的基礎を、そしてわたしの思想的基盤のほとんどを、形成してくれたといつても

留学の動機

東京大学大学院の修士課程では、北方アビダルマ仏

よいほどです。今や、わたしの心の中で、インドは第二のふるさとなりつつあります。

このたび、善光寺御住職の黒田大圓老師から、「インド留学のことを『成寿』に書いてみては」というおすすめを頂き、インドで見たこと、聞いたこと、また考えたことを思いつくままに記してみようと思います。



東方学院講師
法政大学阿部慈園

教（いわゆる小乗仏教）の文献を扱い、「俱舎論智品」の研究」と題する修士論文をまとめました。昭和四八年三月に博士課程に進学することが決まりました。指導教授や二、三の先生方から、「阿部君、パーリ仏教に転じたらどうかね」と勧められました。パーリ語は大学の一年のときから手がけていましたので、「はい」と答えました。

指導教授は「近ごろ、原始仏教やパーリ仏教を本格的にやる人が少なくなつてねえ、君ぜひやりたまえ」といいつつ、一、二、三のパーリ語で書かれたテクストを示されるので、では本腰を入れてやつてみようかとう気になり、文献資料を集めはじめました。

そのころ、藤沢市の小栗堂というところでパーリ語の学習会がありました。門司に住むウー・ウエーブック長老が講師で来ておられ、「これからパーリ仏教を研究してゆきたい」と話したところ、長老は「ではビルマへ留学したらどうですか」とビルマ留学を勧めてくれました。



そのことを指導教授に相談すると、「君、ビルマもいいけど、インドはどうかね。ブーナのバ・バットが日本人の学生を必要としているから、彼の仕事を手伝いながら、彼の下でパーリ仏教を研究したらよい。」vana大学の博士課程に二年も在籍したら、論文提出資格が得られる。生活費の方は年五十万円として、二年間で百万円。お父さんとも相談してみなさい」と、今度はインド留学を勧めてくれました。

父に話すと、「費用のことは何とかするから、留学の

話をお受けしなさい」といってくれました。永平寺の育英奨学生になるようはからつてくれました。永平寺の奨学生になるために、故秦慧玉禪師や現監院鈴木祖光老師が御尽力してくれました。

入学手続きから渡印まで

翌四九年五月からブーナ大学への入学手続きが始まりました。入学願書や成績証明書などをインドへ送つて、同年六月、ブーナ大学から「貴君を一九七四年六月一八日付でブーナ大学サンスクリット科の博士課程の正規学生と認める」という入学通知書が届きました。

これを持ってインド大使館へ行き、ヴィザ（入国査証）を申請しました。七月一九日に申請受理してから、約三ヶ月を費して、一〇月二二日に一年のエントリー・

ヴィザを大使館はくれました。「なお、現在は一年のヴィザしかくれず、インドで一年ごとに更新するようにな

なりました。」

同年十一月一日、多くの親しい人たちに見送られて羽田を飛びたちました。後で、母が目がしらをハンカチでふいていたと父から聞きました。わたしは、初めての海外、初めての飛行機でしたので、心はすでに印度に飛んでいました。

バンコックに四泊し、同月五日ボンベイ空港に降りたちました。光の祭り「デイワリ」のころでした。ボンベイに四泊し、九日にブーナ入りしました。まず、これからインドの師とあおぐババット先生に挨拶にゆきました。

「P・V・ババット」と書かれた表札を見たとき、とうとうやつてきたと思いました。石でできた階段を上つていくと、先生が部屋の入口まで出むいて、にこやかに手をさしのべてくれました。広い、大きな、あたたかい手でした。

ときには、ババット先生は満八十歳、小生は二十七歳でありました。

(つづく)

